

A 4 7 / 3 3

ものづくり ～表現する力を育てる焼き物教育～

坂本 瑞穂 (奈良育英中学校・高等学校)

はじめに — 焼き物教育について —

研究テーマに「表現する力を育てる」という副題を入れたのは、日々の授業の中で、生徒の表現力が年々低下しているのではないかと思ったからだ。もちろん、環境やその他の変化という要因もあるだろうが、数年前と比べると、明らかに生徒の表現力の幅とでもいうものが狭くなってきている。

それは美術に限らず「芸術」という教科全体に共通する問題で、例えば音楽なら、楽曲を聴いて同じように歌ったり演奏したりすることはできても、作曲して自分なりにアレンジすることが難しい。書道なら、手本を見て書くことはできても、創作することが苦手である。そして美術なら、ものを見て描いたり、絵画を模写することはできても、デザインを一から起こすことがなかなかできない…。芸術活動全般において、表現するということが苦手意識を持つ生徒が増えてきているという印象を受ける。そして、「表現すること」への苦手意識が、昨今の希薄な人間関係にも繋がっているのではないかと思った。

では、どんな素材ならば自分の思うように表現しやすいか。過去の授業を思い浮かべると、樹脂粘土を使った課題のときに、生徒が目を輝かせて制作していたことを思い出した。触覚…手で直接素材に触れることは、とても脳を刺激すると聞いたことがある。ちょうど、学園創立100周年の記念事業で陶芸窯も作ってもらえることになった。これだ！と思った。陶芸なら、触覚を最大限使いながら、完成までの過程を経験し、最後には実際に使える作品ができるので達成感も味わえる。その作品が、人とのコミュニケーションにも役立つのではないか。そんなことを考えながら、手探りで焼き物の授業を始めていった。

授業実践 1

課題	「はにわ作り」
対象	中学1年生
素材	テラコッタ粘土
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土という素材に慣れる。 ・自分は「何を作りたいのか？」に気づく。 ・自分の思っかたちを3次元にすることができる。
展開	<p>1. 「はにわ」ってなんだろう？</p> <p>死者を守るものとしてお墓に入れる、生前の生活を再現したもの、単なる装飾品、</p>

	<p>祈りや願いを込めたもの…など、諸説がある。生徒に画像も見せながらそんな話をし、いつか自分が永い眠りにつく時に、一緒に連れていきたい「はにわ」を作る。自分の祈りや願いってなんだろう？自分にとっての「はにわ」ってどんなものだろう？自分はどんな「はにわ」を作りたいんだろう？</p> <p>2. 粘土に慣れる 素材はテラコッタ粘土を使う。テラコッタ粘土の最大の特徴は焼成の段階で割れる可能性が少ないことであり、初心者向けの素材である。そのため、技法的なことを毎回指導しなくても、ある程度の薄さに均一に伸ばすことを心がけるようはじめの段階で指導しておく。</p> <p>3. はにわを作る 自分の中にあるイメージをかたちにしていく。自分の中のイメージと実際に作るかたちに折り合いをつけながら制作を進める。特別な道具はいらないし、道具の使い方でそんなに変わるものでもない。土と水と自分の手さえあればできる課題である。自分に必要なものはなんだろう？気持ちを込めて作る。 乾かして焼成する。</p>
反省	・「はにわ」とは何かを考えるうえで、最初に画像を見せたので、「はにわ」というもののイメージが固定化されてしまった。特徴的な「目と口の部分は穴を開ける」や「寸胴型」など真似している部分が多々あった。
評価	・作品のイメージやかたちは自分で見つけてほしい。だから、キャラクターなどの作り物を真似するのは評価に入らない。やっていくと「こうしたい」という思いが出てくる。頭の中のイメージを外に置き換えることができているか。

授業実践 2

課題	「土笛作り」
対象	中学2年生
素材	テラコッタ粘土
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・音の出るしくみを知る。 ・中空にするなどの難しい作業に挑戦してみる。 ・音を出せる作品を作る。
展開	<p>1. 土笛のしくみを知る 吹き口から息を吹き込むと、共鳴口のところで息が上下（笛の中と外）に分断されて、そのときに音が鳴る。だから、共鳴口の角度が重要である。音の出やすい形状というものもあり、球体は吹き口、共鳴口を設定しにくいので避けた方が無難だということも学ぶ。</p> <p>2. 土笛を作る まず、塊から土笛本体のかたちを作る。思い思いのかたちを作り、次にそれを中空にする。糸で半分に割り、かきベラで中の土を掻き出す。1 cm～1.5 cmほどの厚みを残して外側のかたち通りに中をくり抜く。 次に吹き口と共鳴口を作る。幅1 cm、厚み2 mmほどの棒を吹き口から内側のかたちに沿って差し込み、その延長線上に共鳴口を作る。共鳴口は1辺が約1 cmの正方形で、吹き口から一番離れた辺のみ鋭角に削り取る。吹き口、共鳴口ができたら掌で半分に</p>

	割った面を塞いで試し吹きしてみる。音が響いて鳴るようなら成功。 次に割り口を元に戻す。割り口を荒らしてドベを塗り、圧着させる。仕上げに柔らかめの土をひも状にして接着面につけ、ならずと頑丈になる。 乾かして焼成し、ポスターカラーで彩色する。
反省	・共鳴口の説明が理解しにくかったのか、制作の途中で生徒が何度も聞いてくることがあった。模型など作って、もっと分かりやすく説明できれば良かったと思う。「全員、音が出る作品を作る」ことを目標としていたが、残念ながら音が出ない作品もあった。
評価	・音に関しては努力でどうにもならない部分もあるので、重要視はしない。それよりも、いかにこだわってかたちを作ったか、愛着を持って制作に取り組んでいたかを重要視する。かたちはどうしても似た感じになりがちなので、ポスターカラー彩色でオリジナリティを出せているか。

授業実践 3

課題	「食器作り」
対象	中学3年生
素材	信楽A陶土
ねらい	・陶土という素材に慣れる。 ・使用時をイメージし、「使いやすいオリジナルデザイン」を考える。
展開	<p>1. 素材に慣れる</p> <p>陶土という素材にまずは慣れる。土を練って作業しやすい硬さにする。何度も何度も練り、時間をかけて土と触れ合い土と向き合う。練っていると、やがて体温や空調の関係で土の中の水分がなくなり、再び硬くなっていく。その都度、霧吹きで適量の水分を足し、捏ねやすい硬さに戻す。その作業を繰り返す、扱いやすい硬さにする感覚を覚えることが重要。やってみないとわからないことが多いが、いずれは土の水分調節から作品の状態管理まで、全ての作業を自分で管理できるようになる。</p> <p>2. 食器を作る</p> <p>テーマは底と側面があるもの。そしてオリジナルのデザインであること。どんな食器ならば食事が楽しいのか、使いやすいのか。手びねりの紐づくりとたたらづくりの技法を説明する。生徒は自分のなかのイメージをなかなかかたちに表現できずに苦労していた。制作が始まると皆黙々と作業し、このときに初めて、生徒の方から時間が足りないので朝補習をしてほしいという意見が出た。土は既製ではないから、そこが面白い。失敗も成功も、やってみないと実感できない。やってみて感じたことは残る。素焼きの後、釉薬をかけて本焼きをする。</p>
反省	・陶土の扱いに慣れてほしくて、かなりの時間を土を練ることに割いた。結果、土の水分量を管理することには慣れてきたが、実際の制作がなかなか思うように進めることが出来ない生徒が多かった。朝補習も行ったので、生徒間で制作進度と作品の完成度に大きな差が出た。
評価	・まず、土に慣れ、自分で制作過程を管理することができたか。それから、「オリジナル」を意識してデザイン、制作することができたか。

おわりに

陶芸の授業を終えて、まず一番に思ったのは「楽しかった！」ということである。やっている教師側が、とても楽しかった。生徒たちの様々な表情を見ることができて、嬉しかった。それに尽きる。

土は生きている素材である。それは環境によって激変する。教室の温度や湿度、空調の調子、その季節の風のあたり具合、掌のあたたかさ…などなど、素材を変化させる要因は山ほどあって、その都度水を加えたり練り直したり、ちょうどいい具合に整える。そのたびに、土と向かいあい、その様子に注意を払う。忍耐力や観察力も鍛えられた時間であったのではないだろうか。

「自分で考えなさい」「人の真似はしない」「自分だけのものをつくりなさい」「なにが言いたいのか、なにをつくりたいのか、人に伝わるものをつくりなさい」毎時間のように生徒にかけていた言葉である。正直なところ、表現力を育てられたかと問われれば、「わからない」としか答えられない。しかし、生徒の表情を見ていて、「美術って、結構楽しい」という授業の原点でもあるその感情を、思い出させることができたのではないかと思う。いつか、彼らが成長して、陶器に興味を持ってくれたり、ふと「ちょっと陶芸でもやってみようかな」と思ってくれたりしたら、とても嬉しいことだと思っている。